



輪廻の世界観の先に

ご法事や追悼法要で皆さまとともに読誦する「阿弥陀経」というお経の最後、「…天人阿修羅等聞佛所説歡喜信受作禮而去…」(天上界、人間界、阿修羅の世界など、お釈迦様のお説教を聞いて信を得て喜んで帰って行きました)で結ばれているのはどうしてなのか、と思ったことがあります。その頃は、地獄、餓鬼、畜生を含めて六道であるはずなのにそこに含まれていないのが気になったのです。

* * *

それは、お釈迦様の教を聞いて帰ったのは、言葉が通じる世界だからで、人間界の下に阿修羅の世界があって、その下が畜生、餓鬼、地獄と続くのだが、これらの世界に共通なのは言葉が通じないことだという。したがって、お釈迦様の話を聞いて喜んで帰ることの出来るのは、天上界、人間界、阿修羅の世界で畜生などは入っていないからです。

しかし、仏の悟りに近いのは我々人間のように理屈をこねる言葉の世界よりは、畜生界の動物達ではないか、畜生は仏になるのにお説教を聞く必要がないからではないかと思ったりしたものです。

今我が家には、寝たきりの猫がいます。地域猫として可愛がられ、一代は生かしてあげて欲しいという誰かに避妊手術をしてもらった印である耳が三角に切られた猫で、いつの間にか我が家が住処となり4年くらいになりましたが、日々の谷戸パトロールは欠かしたことがなく、あの大雪の朝もいつものように出かけましたが戻らず、次の日に足を引きずって帰ってきました。腰の骨が折れているようで、手術を受けましたが甲斐なく、首から下の運動機能が失われ、今は退院後設えたベットの中で唯々静かに呼吸をしながら、口元にもっていき水を時折り口にして、おとなしく、じっと死に近づいています。まるで死を受け入れようとする即身仏のようです。

横たわってじっと我々を見る目は、何かを訴える眼差しではなく、何かを教えているかのようです。

人は自らの終末を、このように受け入れ、煩惱を滅したかのように、安らかに終えていけるのだろうか、また我々には許されない羨ましい終末だと思わされます。

谷戸のどこかで横たわって死んで逝けたらうに、足を引きずって帰ってきたのは、たとえ

自分意思で動けなくなっても、いのちのかぎり生きることを見せようとしたのか、私たちの行く末を気づかせてくれたのか、不自由さを生きる「いのち」の尊厳を教え示してくれています。

* * *

六道は、死後陥るかもしれない人間世界の他にあるものではなく、私たちが人生で繰り返す逃れられない現世にある苦界と味わっています。人生には餓鬼道も畜生道も地獄もあり、人間界や天上界も、つかの間の有頂天もある、我々人間の世界そのものを表しているのです。それは人間の中途半端な知識がもたらす「はからい」「傲り」から自らが作り出している問題です。本能的欲の他に煩惱のない畜生には成仏の邪魔になるものがなく、今そばで横たわる猫の余命は菩薩道を教えてくれているのかもしれない。

してあげるより

してもらふ存在に

私はうまくなれるだらうか

新聞の歌壇でつけた詩です。「終活」や「墓じまい」「自分らしい葬式、お墓」を準備するより、いつその時が来ても委ねられる自分になっておくことの大切さを感じています。

合掌

奏庵法座

日時
2月26日(月)
午前11時～

「真宗宗歌」
正信偈
法話
早島理師
龍谷大学大学院教授
北海道大成寺住職
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

この春で定年退官され自坊に戻られる前にご縁をいただきます。教授としては現役最後ですが、同輩の彼のタフさに励まされ、穏やかでやさしいお話が楽しみです。

仏教は自他共によるこべる教えです。道すがらにも布施ができます。そのことを思いながらお参り下さい。



できることから ダーナ（布施）の実践

ダーナ活動は浄土真宗の仏教婦人会が中心になって広められてきました。

ダーナとは、仏教の布施のことで、法施（真実の仏法を伝え広める）、財施（金品を分かち合う）、無畏施（恐れを除き、癒しと勇氣を与える）、無財の七施（思いやり、ささえあう心）などに分かれます。

無財の七施とは、

- 1、眼施（あたたかいまなざし）
- 2、和顔悦色施（にこやかな）
- 3、言辞施（やさしい言葉）
- 4、身施（精一杯のおこない）
- 5、心施（慈しみ深いこころ）
- 6、床座施（あたたかい席）
- 7、房舎施（気持ちよく迎える）

いつでも、どこでも、だれでも、自分のできる範囲で実践できるものであり、自らの生き方が表れるものです。

関東大震災の支援活動の先端に立たれた九条武子夫人のご活躍とその志が、日本のボランティアの始まりといわれ、本願寺ではそのご祥月2月を「ダーナ月間」として布施（ダーナ）が実践されています。

盛んになるボランティアも布施の心とともに行わなければなりません。布施は人々全てにとって無ければならない行為だからこそ、「させていただいてありがとう」という心が大切なのです。

「2月逃げる、3月去る」春はすぐ来る。巢立ちの季節に話題を提供した「アルマーニ制服」問題。

「銀座らしく」という泰明小学校長の弁明に、そこから巢立っていった生粋の銀座育ちの人々は納得しているだろうか。■カナダから帰国して住んだのが築地で銀座が生活圈だったことがある。バブル末期だったが築地は今のような観光客ではない都民で活気にあふれ、銀座も今よりずっと賑わっていた。「ああ都会だなあ、銀座だなあ」と思う好きな情景は、料亭の裏で一服する見習いであろう板前や、地方から出てきただろうみゆき通りの黒服たちの姿で、その中を普通に走り回って遊ぶ学校帰りの子供の姿は、「都会っ子」というより「町っ子」だった。■銀座に生きる人々に、生まれも育ちも銀座という人は少なく、地方から仕事を求めてやってきた人がその華やかさを支えている。私が知り合ったそういう人々も銀座は特別だというのが、それを意識する間は「よそ者」だと見抜かれるということもわかっている。ブランドに頼らないのも銀座らしくないからだ。学校もその地域ならこそ育まれた校風があり、それが価値観や感覚の根っこになっていく。その感性が着るものも選ぶのであって、ブランドが銀座人を育てるのではない。■この話から懐かしく思い出されたのが、北海道から出て大学時代を過ごした京都の、いつでも居候させてくれたお好み焼き屋の「おばちゃん」だ。京都の中心、祇園祭の鉾がビルの下を通る河原町通りの三条の角にあって、クラブ仲間の母親が経営者だった。そのおばちゃんの、普段着に前掛け、買い物カゴを提げ下駄を鳴らして行く先は「明治屋」。その姿が好きだった。おばちゃんはまた、息子の結婚式にあたり前のように上質な留袖姿を着こなした貫禄ある京女でもあって「都の人」を感じさせたものだ。■絵に描いたような都会人は偽物という。それは都会人だけにあらずだ。社会に絵に描いたような偽〇〇をつくらないためには、我々がまず見る目を養うことだろう。田舎から出て最初に住んだのが千年の都だったのは幸運だった。